

様式C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 7 月 5 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2006～2008
課題番号：18830011
研究課題名（和文）
フランスにおける「フレネ技術」を導入した異年齢学級と、日本の複式学級との比較
研究課題名（英文）
Multi-grade classes using the “Freinet techniques” in France and combined classes of two grades in Japan: A comparison
研究代表者
坂本 明美（SAKAMOTO AKEMI）
山形大学・教職研究総合センター・講師

研究成果の概要：

フランスにおいて「フレネ技術」を導入した異年齢学級では、「フレネ技術」と「学習材」に支えられ、子どもたちの自律的で協同的／協働的な学びが遂行されていた。「異年齢」という特徴よりもむしろ、「異質性」と「多様性」に基づいた教育、個性化と協同化（協働化）との調和的融合、異学年同士の協同／協働、「共同体」の一員として参加する子ども、「市民的資質（市民性）」の育成、などが特徴的であった。日本の複式学級においては、子どもたちを自律的、協同的／協働的な学びの主体とすることが求められていた。においては、特に、を参考にしながらの「学習材」の開発と異学年同士の「協同／協働」が、新しい教育実践の手がかりとなり得るだろう。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,290,000	0	1,290,000
2007年度	330,139	0	330,139
2008年度	549,861	164,958	714,819
年度			
年度			
総計	2,170,000	164,958	2,334,958

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：フレネ技術、フレネ教育、異年齢学級、複式学級、学習材、協同／協働、共同体、市民的資質（市民性）

1. 研究開始当初の背景

(1)坂本は、2005年4月に山形大学に着任し、日本における複式学級の実態を山形県で初めて見ることができた。二つの異なる学年の子どもたちが一つの同じ学級に所属する複式学級では、教師は同一の教科で二種類の内容の一斉授業を同時並行して行う、と

いう授業スタイルが基本となっている。教師が一方から他方へ「わたり」を行い、それぞれの学年の子どもたちに「直接指導」「間接指導」を行いながら順次対応し授業展開していく様子は、興味深い点も多々みられた。しかし、教師にとっての負担は大きく、さらに、その教師の負担の大きさにもかか

ならず、異年齢の子どもたちが一つの教室で学び合うことのメリットを認識することが難しいと感じることもあった。また、子どもたちの自発性、異年齢の子ども同士のかかわり、協同的、あるいは協働的な学びが生み出される場面が少ないという印象も受け、日本における複式学級の問題点や、教育方法における限界を感じた。

(2)本科研費をいただく前のことであるが、坂本は、2005年12月3～9日、「平成17年度国語力向上研修 調査研究団」の「ドイツ・フランス班」の一員として、フランスを訪問した。これは、「独立行政法人 教員研修センター」が主催した研修で、直接的には文部科学省から依頼されたものであった。この研修の自由時間に、坂本は、個人的にセーヌ・サン・ドニ (Seine-Saint-Denis) 県、ボビニー (Bobigny) にある公立小学校のマリー・キュリー学校 (l'Ecole Marie Curie) を訪問し、異学年混合学級において「フレネ技術」を導入している教室を参観することができた。担任教師フィリップ・ラミ氏の学級は、人数が少ないという事情がなくても、意図的に異学年を混合して学級編成していたクラスの一つであり、小学校第3・4・5学年の三つの学年の子どもたちが一つの学級で学んでいた。それは、異年齢学級を構成して授業を行う方が教育効果が高いと考えられているからである。フィリップの学級における教育実践では、「異質性」に基づいた子どもたち同士の「協同」という教育効果を主なねらいとしていた。隣のクラスのナタリーという担任教師の学級も同様の学級編成で、小学校第3・4・5学年の異学年混合学級であった。そして、フィリップとナタリーの二つの学級は、実践においては合併しており、それぞれの学級の子どもたちは、時々、必要な時に互いの学級を行き来しながら学んでいた。この時の参観はフィリップの学級を中心に行ったが、2クラス合同の「集会 (la réunion)」の様子も観察できた。この時の観察を通して、坂本は、「異年齢学級」という視点で、特に「協同」「協働」という概念からアプローチして「フレネ教育」の研究を行うことの可能性を見出し、観察した内容をもとに、フィリップの記述も用いながら次の論稿にまとめた。

坂本明美「異年齢学級」における「協同的な教育」の実践 フランスの公立小学校におけるフィリップ・ラミ学級 (Cycle3) を通して 『山形大学 教職・教育実践研究』第1号、山形大学教職研究総合センター、2006年3月、pp.1～10。

(上記の論稿においては、「la réunion」を

「会議」と翻訳した。)

(3)「フレネ教育」についての先行研究において、「異年齢学級」(あるいは「複式学級」「複々式学級」という視点でテーマ設定して研究したものは無かった。

(4)上記の(1)～(3)より、異年齢学級における「協同」「協働」という主題で、フランスにおいて「フレネ技術」を導入した異年齢学級と、日本における複式学級との比較を行い、さらには、日本の教室で「フレネ技術」を導入した教育実践も参考にしながら、上記の主題を今後さらに追究していく価値があると確信し、本研究を着想するに至った。

2. 研究の目的

(1)本研究は、フランスと日本で教室観察を行い、フランスで「フレネ教育」(「フレネ技術」)を導入している異年齢学級(異学年混合学級)と、山形県内の複式学級を中心に、日本の複式学級とを比較し、従来とは異なる新しいスタイルの小規模・複式学級の授業とカリキュラム開発に取り組むことを目的とする。

(2)「研究開始当初の背景」の(2)で記述した、フランスの公立小学校「マリー・キュリー学校」において、「フレネ技術」と「学習材」が果たす役割が大きかった。さらに、本科研費をいただくまで、坂本はフランスにおいて、「フレネ教育(フレネ技術)」を実践に導入している学級をいくつか観察してきており、同様に「フレネ技術」と「学習材」が果たす役割の大きさを感じていた。そこで、「異年齢学級」という特徴に焦点を当て、「フレネ技術」と「学習材」が、異年齢学級においてどのような教育効果をもたらし得るのか、検討する。

(3)フランスで「フレネ技術」を導入した異年齢学級の子どもたちの学びにおける、子ども同士の関係、教師の役割について考察する。

(4)日本の複式学級における複式授業の特徴を明らかにする。

(5)日本の複式学級において、従来とは異なる新しい教育方法と授業内容づくりを行い、「学習材」を開発する。

3. 研究の方法

(1)フランスにおいて「フレネ技術」を導入している異年齢学級の教育的日常を観察・

記録し、考察を行う。

「フレネ教育」の創始者であるセレスタン・フレネ(Célestin FREINET: 1896~1966)が、1935年に南フランスのアルプ=マリタイム(Alpes-Maritimes)県、ヴァンス(Vence)に開校した「フレネ学校(Ecole Freinet)」ヴァンスの「フレネ学校」における観察: 2007年3月12, 13, 15, 16, 19, 20日【全校で3クラス。幼児クラス(3~4歳、4~5歳、5~6歳)26名、小学校低学年クラス(CP・CE1クラス=小学校第1・2学年)20名、小学校中~高学年クラス(CE2・CM1・CM2クラス=小学校第3・4・5学年)20名】

フランスの公立小学校において「フレネ技術」を導入しているいくつかの異年齢学級

セーヌ=サン=ドニ県、ボビニーにある「マリー・キュリー学校」における観察: 2007年3月22, 23, 24日(24日は土曜日のため午前中のみ観察)【CE2・CM1・CM2クラス(小学校第3・4・5学年の異学年混合学級)を3クラス観察。担任教師フィリップのクラスの児童数は23名で、CE2(小学校第3学年)が5名、CM1(小学校第4学年)が9名、CM2(小学校第5学年)が9名。ナタリーのクラスの児童数は24名で、内訳は不明。ステファンのクラスの児童数は23名で、CE2(小学校第3学年)が8名、CM1(小学校第4学年)が9名、CM2(小学校第5学年)が6名。】

セーヌ・エ・マルヌ(Seine-et-Marne)県、モーホガール(Mauregard)にある「モーホガール初等学校(Ecole Primaire de Mauregard)」における観察: 2009年3月9, 10, 11日(3月11日は、午前9~11時の補習を観察)【小学生クラスが1クラスと、幼児クラスが1クラスの、全校2クラス。小学生クラスは、CP(小学校第1学年)が4名、CE1(小学校第2学年)が4名、CE2(小学校第3学年)が5名、CM1(小学校第4学年)が3名、CM2(小学校第5学年)が4名で、合計20名。幼児クラスは、2~3歳が3名、3~4歳が5名、4~5歳が1名、5~6歳が4名で、合計13名。なお、月曜日の午前中に、障がいを持った8歳の女の子が一名、幼児クラスに通っている。】

マイエンヌ(Mayenne)県、ボーモン=ピエ=ドゥ=ブフ(Beaumont-Pied-de-Boeuf)にある「ビズ学校(Ecole Bizu)」における観察: 2009年3月12, 13日【CE1~CM2(小学校第2学年~第5学年)の全校1クラス。CE1(小

学校第2学年)が6名、CE2(小学校第3学年)が8名、CM1(小学校第4学年)が7名、CM2(小学校第5学年)が5名で、合計26名。】

(2)上記の(1)との比較・考察のための観察・記録を行う。

フランスの公立小学校で、「フレネ教育」を実践に直接的には導入していない異年齢学級を観察・記録し、考察する。

ジロンド(Gironde)県の公立小学校(L学校)における観察: 2009年3月16日【CP~CM1(小学校第1学年~第4学年)の全校1クラス。CP(小学校第1学年)が7名、CE1(小学校第2学年)が4名、CE2(小学校第3学年)が1名、CM1(小学校第4学年)が7名で、合計19名。】

「フレネ教育」を実践に導入していない単式学級を観察・記録し、考察する。

ジロンド県の公立小学校(O小学校)の、あるクラスにおける観察: 2009年3月17日【全校8クラスの学校で、観察したのはCE1(小学校第2学年)の児童数23名の学級。】

上記の(1)と(2)の、を合わせて比較・考察する。

(3)日本における複式学級の実践として、山形県内の複式学級を中心に観察・記録し、考察する。

(4)日本のフレネ教育研究会の会員の協力を得ながら、日本において「フレネ技術」を導入している学級の教育実践から、特に、「フレネ技術」と「学習材」の役割、子どもたちの学びにおける「協同/協働」について考察する。

(5)フランスにおいて「フレネ技術」を導入した異年齢学級と、日本の複式学級との比較のために、上記の(1)と(3)を比較・考察する。比較に当たっては、特に、「協同/協働」のあり方に焦点を当てる。上記の(2)の内容も参考にする。

(6)上記の(5)の比較・考察に加えて、(4)の内容を参考にしながら、最終的な目標として、日本の複式学級における新しい教育方法・教育内容の開発、特に、新しい授業構成カリキュラムと「学習材」の開発を目指す。

4. 研究の成果

(1)フランスにおいて「フレネ技術」を導入した異年齢学級の観察を通して明らかになったこと(「フレネ教育」を直接的には導入していない異年齢学級との比較、「フレネ教育」を導入していない単式学級との比較も含めて)

「フレネ技術」を導入した学級では、「異質性」と「多様性」に基づいた教育実践が展開されており、豊富な「学習材」を媒介として、子どもたちが個人で立てた「計画」に基づき、他者と「協同/協働」しながら学んでいた。このように、個人として自律しながらも他者と協同/協働しながら学ぶ子どもたちの姿を観察することができた。このような子どもたちの学びを支えていたのは、「フレネ技術」とよばれる諸技術と「学習材」であることを、改めて認識することができた。本研究では特に、「協同」「協働」に焦点を当てた。(なお、「フレネ技術」を導入しているピズ学校では、「計画表」は実践されていなかった。)

「学習材」が、子どもたちの学びにおいて大きな役割を果たしていた。子どもたち一人ひとりが自分の学習リズムに合わせて自ら「学習材」を選び取り、個人学習を行ったり、子どもたちが興味・関心を持ったテーマについて、すぐに調べられたりするような「学習材」を豊富に準備しておくことが不可欠である。「フレネ教育」を実践に直接的には導入していない異年齢学級では、教師が複数の学年の内容に合わせて教材・学習材を自分で準備しなければならず、教師にとっての負担が大きいことがわかった。「フレネ教育」では、「学習材」の多くは、教師たちの協同によって開発・製作されている。一人の教師の力だけでは困難なことでも、教師たちの協同によって大きな力となり、子どもたちの学びをさらに豊かなものにしてくれる。

2007年3月に観察したヴァンスのフレネ学校において、「支援(parrainage)」のペアを決めた実践を行なっていることと、小学生クラスの二つのクラスにおいて、基本形として決められた座席の配置が、異学年の子ども同士が混合した座席になっていることがわかった。観察し得た内容によると、「支援」とは、異学年の子ども同士でペアを組み、上学年の子どもが下学年の子どもの支援をしてあげるものであった。さらに、小学校低学年クラスでは、CP(第1学年)とCE1(第2学年)との「支援」のペアが決められており、基本形の座席も、教室に配置された三つのグループのそれぞれにおいて、この「支援」のペアが隣同士で座っていた。中～高学年クラスにおける基本形の座席は、教室に配置された三つのグループのそれぞれ

れにおいて、必ずCM2(第5学年)の子どもが入るように配置されており、各グループ内で、CE2・CM1・CM2(第3・4・5学年)の三つの異なる学年が混合した配置になっていた。さらに、学校内における異年齢の「支援」として、幼児クラスの子どもたちを支援するためのペアも決められていた。なお、上記のような決められた「支援」関係以外の、異学年の子どもたち同士の自然な支援・協同の姿も、多くみられた。

「フレネ技術」を導入していない学級も含めて、すべての学級において、座席の配置には教師の工夫がみられた。

特に「フレネ技術」を導入している学級では、教室空間(教室環境)に工夫が施されていた。上述したような豊富な「学習材」、子どもたちが学ぶための道具、材料、素材などが豊かに準備され、教室空間としても学習内容ごとの「コーナー」が設けられていた。教室は、「アトリエ」と言ってもよいような環境構成がなされていた。

「フレネ技術」を導入している学級においては、「学校共同体」あるいは「共同体」の一員として参加していく子どもの姿が印象的であった。「フレネ教育」では、一人ひとりの学習のリズムや興味は異なる、という考え方が土台となっており、「異質性」と「多様性」に基づき、個性化と協同化との調和的融合、個人と共同体との結びつきが実践として具体化されている。そのような「フレネ教育」を実践に導入した学級の観察においては、「異年齢」という特徴が感じられないほどであり、私の目には、むしろ「共同体」の一員としての子ども、として映った。一人ひとりが他者と協同(協働)しながら、責任感を持った自律した市民となるように、「市民的資質(市民性)」を育成することにつながる実践が行われていた。

2007年3月22～24日に観察した「マリー・キュリー学校」においては、「フレネ教育」を導入している小学校第3・4・5学年の異学年混合学級を3クラス観察した。どのクラスにおいても、子どもたちと教師とが「共同体」の一員として参加する姿が印象的であり、子どもたちの「市民的資質(市民性)」を育成することにつながる実践が展開されていた。そのなかで、三人の教師の実践に共通点もあったが、それぞれの教師の考え方や独自性によって、その実践内容や方法が異なっていた。相違点の一つとして、「態度に関する帯(Les ceintures de comportement)」がある。これは、柔道のように帯の色で段階が分けられており、それぞれの色ごとに義務と権利の内容が決められているものである。また、帯の色によって「仕事(métiers)に関する分類」も決めら

れている。この「態度に関する帯」は、担任教師ナタリーとステファンのクラスでは実践されていたが、フィリップのクラスでは実践されていなかった。この点について、フィリップの回答によると、彼のクラスでは「態度に関する帯」の実践とは逆のやり方を行っており、まず、子どもたちに自由を与えて許可し、何かダメな行いなどがあれば、その許可した内容の中から差し引いていくというやり方を行っている、とのことであった。なお、調べてみたところ、「態度に関する帯」のシステムは、「制度主義教育学 (la pédagogie institutionnelle)」を参照した実践であることがわかった。

複数の学級を観察したことによって、次のようなことがわかった。フランスにおいて、「フレネ教育」についての考え方は一人ひとりの教師によって異なる。また、「フレネ教育」を実践に導入している学級のそれぞれにおいても、「フレネ技術」をどの程度（どの部分を）、どのように導入して実践しているか、ということによっても異なってくる。さらに、その教師の独自性、個性も、学級における教育実践の多様性にもつながってくる。

(2)日本の複式学級における観察から明らかになったこと

「間接指導」時の重要性

それぞれの学年における「間接指導」時の、子どもたちによる自律的で自発的な学び、協同的・協働的な学び合いが重要となる。そのためにも、子どもたちが、各学年で決めた「学習リーダー」(学級によっては、「板書係」も決めている学級もある。)を中心に、自分たちで学習を進めるのだ、という意識を持って、子どもたち同士で学び合うことが求められる。ただし、「学習リーダー」を育てることも大切ではあるが、「学習リーダー」は単に形式的な司会者のような役割を果たすものではない。また、「学習リーダー」以外の子どもたちも含めて、一人ひとりが自律しながら他者ととともに、真に協同的/協働的な関係を築いていくことが必要である。

子どもたちが、わからない時に「わからない」と言い合える関係、自然な形で話し合い、学び合える協同的/協働的な関係づくりが大切である。

協同/協働について

「協同/協働」については、多くの複式学級において、同学年同士の「協同/協働」は実践されていたが、異学年同士の「協同/協働」や異学年同士の学び合いの機会が極めて少ないと感じた。

教師の支援のタイミングが重要である。

特に、「間接指導」時に子どもたち同士で学び合っており、そこへ教師が「わたり」でやって来る際に、教師の支援のタイミングとして、しっかりした見極めが大切である。

(3)課題

フランスにおいて「フレネ技術」を導入した」複数の異年齢学級や、「フレネ教育」を直接的には導入していない異年齢学級、「フレネ教育」を導入していない単式学級など、多様な教育実践について観察することができたが、さらに考察を深めて論文としてまとめ、発表したい。

当初、日本の複式学級における新しい授業構成カリキュラムの開発、及び「学習材」の開発を最終的な目標として設定していた。しかしながら、その手がかりとなる「フレネ教育」、「フレネ技術」から着想を得るにあたっては、教育方法の問題だけにとどまらず、教師の授業観、教育観にもかかわってくる。そのため、もしも「フレネ教育」に着想を得た実践を日本の複式学級に導入しようとするならば、教師にとって、授業の基盤となる教育学の大きな転換が求められる。フランスにおいても、教師一人ひとりにとって「フレネ教育」についての考え方は異なる。また、「フレネ技術」を導入している学級においてさえも、その実践として多様な形があるように、一人ひとりの教師の考え方による違いもある。さらには、子ども、学級、学校、保護者や地域の状況によっても、条件が異なってくる。以上のことから、日本の複式学級において、「フレネ教育」に着想を得た実践を導入することは容易なことではない、と実感した。そのため、当初の目標としての、日本の複式学級において、「フレネ教育」を参考にしながらの新しい授業構成カリキュラムの開発や「学習材」の開発を行うところまでは、到達することができなかった。また、「学習材」については、「学習材」だけを唐突に導入することは、かえってその意義を失ってしまうことになるだろう。なぜならば、子どもたちを自律的、協同的/協働的な学びの主体とすることを目指し、子どもたち同士の協同的/協働的な関係づくりと連動しながら「学習材」の導入を進めていくことが求められるからである。一方、日本の複式学級において着手しやすいと考えられることとして、意識的に異学年同士の「協同/協働」や異学年同士の学び合いを盛り込むことによって、子どもたちの新たな学びが創造されていくのではないかと考えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者

には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

坂本明美「フレネ学校における教育実践
「異年齢学級」に着目して」、『技術
教室』、2008年2月号、No.667、2008年、pp.54
～ 59、査読無し

〔学会発表〕(計 2 件)

坂本明美「フランスの学校でのフレネ教
育の実際」、フレネ教育研究会(フレネ教育
研究会第49回夏季全国集会)、2009年8月24
日、山形県かみのやま温泉(「ニュー村尾」)

坂本明美「フランスにおける「フレネ技
術」を導入した異年齢学級の教育実践 ～
「異質性」と「多様性」を尊重した「共同
体」の一員としての子ども～」、フランス教
育学会(フランス教育学会第25回大会)、2007
年9月17日、宇都宮大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂本 明美 (SAKAMOTO AKEMI)
山形大学・教職研究総合センター・講師
研究者番号：40400535

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し